

宮脇綾子《はりえ日記》について①

—第1巻から第3巻まで—

西崎紀衣

豊田市美術館は創作アブリケ作家・宮脇綾子(1905-1995年)の作品を192件所蔵している。その大半は単体のアブリケ作品であるが、《木綿縞乾柿型集》(1967-89年、15冊)や《縞魚型文様集》(1967-82年、22冊)のように、複数年に渡って様々なアブリケが貼られた折本からなる作品も含まれている。本稿で挙げる《はりえ日記》もまた同様の体裁の作品である。

額装や屏風、衝立のアブリケ作品の場合、展示または印刷物における一瞥によってその様相を認識することは可能である。しかし表出が部分的にならざるをえない折本の場合、その全体像を一目で完全に把握することは不可能である。作家のライフワークともいえる重要な作品であるにもかかわらず、折本70冊からなる《はりえ日記》もその膨大さゆえに、部分的な紹介に留まっている。また過去、作家の生前より幾度か日記の抜粋が書籍化¹されたこともあるが、作品の全体が紹介されたことは未だない。

本稿では《はりえ日記》の第1巻から第3巻までの記載内容を起こし、各該当頁の画像と併せて掲載した。作品の詳細だけではなく作家宮脇綾子の内面を知り、他のアブリケ作品に対する更なる理解を深める一助となると確信している。

作者・宮脇綾子略歴

1905(明治38)年2月8日、東京に生まれる。旧姓門脇綾子。1927(昭和2)年に名古屋市在住の洋画家・宮脇晴(1902-1985年)と結婚、1女2男に恵まれ、主婦として宮脇家を守り続けた。戦争を生き抜き新しい時代を家族と迎えた1945(昭和20)年8月、綾子は夫・晴の了解を得て²、身の回りにある古布や端切れを用いた創作アブリケを開始する。作品の主題として、庭の花や草木、魚、野菜など、身近な事物に着目、「布と遊ぶ」の言葉そのままに素材の特性を活かした、素朴ながらも斬新な作品を制作した。1952(昭和27)年11月、初個展を開催。以降、最晩年に至るまで国内外で作品を発表し続けた。1960(昭和35)年12月には「アブリケ 綾の会」を主宰、以降「綾の会展」を毎年開催。また短期大学や文化センター等でも講師を歴任、多くの後進や愛好者を育てた。1995(平成7)年7月7日、90歳で歿。

《はりえ日記》について

1972(昭和47)年2月18日から1990(平成2)年5月7日まで続けられた絵日記。各巻30.2×21.0cm、概ね45頁前後の折本である。各表紙には〈貼り画帖〉〈はりえ帖〉〈貼り画と水彩帖〉〈はりえ日記〉など様々なタイトルが付けられているが、これらすべてを総称して《はりえ日記》とされる。アブリケの素材は布や紙が中心だが、革や藁、

本物の紅葉や蔓など、通常の作品と同様に、作家の機微に触れた素材も用いられている。また「はりえ」としてはいるが、水彩やペン、色鉛筆による描画も随所にみられる。

「毎日は、とてもやれなだらうけれど、つとめて貼って見よう。³」と始めた日記には、見開き2頁で1日の紙面構成が多いもの特に規定はなく、1日で1頁の場合や、1日に複数頁を費やすこともある自由な構成となっている。旅行などで当日のうちに日記を残せず、後日まとめ書きすることもあれば、展覧会準備等で多忙な時期はしばし中断することもある。

アプリケや描画の対象(綾子曰く、モデル)については直接的、間接的に紙面に記されることが多いが、時に記述内容と無関係に見えるアプリケが貼られる場合(例:第2巻30-31頁 図37)もある。アプリケや描画の対象の名前のみ『』つきで付記される頁がある一方、自らの作品の行く末に対する熱い想い(第2巻22-23頁 図33)や、「香万個乾柿型完成」の喜び(第2巻40-41頁 図42)など作家の気持ちが溢れて余白にまで綴られた頁など、日記らしい自在さを感じられる。また巻にもよるが、戸棚や長持ちなど身の回りを整理した折、偶然再会した過去の小品を貼り付けている(例:第1巻34-35頁 図17や第3巻32-33頁 図60)ことも興味深い。なお過去のアプリケ作品を日記に貼る場合は、「古い作品」を貼った旨をその都度当該頁に記している。

日記の内容を目にするほど、日頃より敬愛する夫・晴の言う「観察の大切さ」の教えに沿うがごとく、綾子は目にした四季折々の草花や野菜、魚、また岐阜県中津川市に所有する宮脇家の別宅の豊かな自然など、私たちが見落としがちな発見や出会いを瑞々しい感性で捉え、巧みに切り取っていることがわかる。また晴や子供たち、知人友人等との心温まる交流や忘備的な記録だけではなく、制作に対する作家の真摯な姿勢をしばしば知ることができるのも日記の醍醐味といえよう。

博物館実習について

豊田市美術館では、2017年度の博物館実習の一環として《はりえ日記》の第1巻から第6巻までを文字に起こす作業を行った。6名の実習生⁴がそれぞれ1巻ずつ担当し、作家と作品および取り扱い方を事前の授業で学んだうえで、筆者を含む学芸員立会いのもと、作業にあたった。記載がくずし字であること、文中に学生が日ごる接することのない旧仮名遣いや旧字体、異字体が散見されることなどにより、1冊全てを起こし終えることは目標とせず、定められた時間内で行いうる範囲とした。学生たちにとってそれ自体が作品でもある日記を解読し文字に起こす作業は、直に作品と対峙し作家の内面に触れる貴重な経験になった。本稿掲載の日記各巻は学生が文字に起こした資料を校正し必要に応じて訂正を加え、また学生が着手にいたらなかった後半の頁については筆者が作業を行った。筆者による作業終了後、さらに作家ご

遺族の宮脇実保子氏、嶋地由美氏、嶋地奈美氏に第1巻から第3巻の内容を確認いただいた。日記の中にも登場する3氏は、晩年の綾子の身近にあってその日常や創作活動をしばしば目にしている。ご遺族との連絡および内容確認、補足説明の聞き取り、記載の過誤の修正等は成瀬美幸が行った。

2017年度の博物館実習で対象になった日記は、下記の通りである。

はりえ日記 1巻：1972(昭和47)年2月19日－5月3日、45頁

はりえ日記 2巻：1972(昭和47)年5月13日－12月14日、45頁

はりえ日記 3巻：1972(昭和47)年12月22日－1973(昭和48)年6月14日、45頁

はりえ日記 4巻：1973(昭和48)年7月13日－9月4日、45頁

はりえ日記 5巻：1973(昭和48)年9月5日－10月20日、43頁

はりえ日記 6巻：1973(昭和48)年10月20日－12月2日、43頁

本稿で掲載する日記は第1巻から第3巻。第4巻から第6巻は次号紀要に掲載し、以降についても継続する予定である。

この度本稿制作にあたり、宮脇実保子氏、嶋地由美氏、嶋地奈美氏には多大なるご厚情を賜りました。ここにあらためて心よりお礼申し上げます。

註

1：『宮脇綾子はりえ日記一』(京都書院、1979年)、『宮脇綾子はりえ日記二』(京都書院、1984年)、『宮脇綾子はりえ日記』(1～3)(東方出版、1997年)

2：嶋地千穂子「母と過ごした日々」『生誕100周年記念 アプリケ作家 宮脇綾子の世界』展カタログ、NHK きんきメディアプラン、2004年、178-179頁

3：「毎夕食後ずつと日記『にちにちのこと』／に貼り画をして居たが、日記には『画』を／描くことにし これからは、ここに貼る事にする／毎日は、とてもやれないだらうけれど／つとめて貼って見よう。／楽しみ帖かべんきょう帖か………」《はりえ日記》第1巻(1972年)、中表紙

4：2017年度豊田市美術館博物館実習生：井関千絵、岡本亜季、谷崎壮太郎、長坂有紗、長田詩織、山際妙子(五十音順)

凡例

- ・本文中の旧仮名遣い、旧字体、異字体、踊り字は原則として原文のままとした。
- ・本文中のカッコ等の記号は、原則として原文のままとした。
- ・行間に付記されている挿入文はすべて〈〉で本文中に表記し、文字サイズを統一した。
- ・レイアウト上の細かな改行は1行にまとめた。
- ・文章末の日付やサインは、行の下揃えとした。
- ・人名については註釈で解説しているが、一部調査が行き届かなかったものがある。

